



『錦絵のちから 幕末の時事的錦絵とかわら版』

富澤 達三 (COE研究員・PD)

今日、情報化社会のなかで映像メディアが日常生活の諸領域に深く浸透し、人々の価値観や文化・芸術のあり方を大きく変容させている。しかし、日本における視覚的メディアの浸透による社会変化は、現代になって初めて起きたわけではない。すでに19世紀の江戸では、視覚情報に媒介された社会意識の変化が広い範囲で起き始めており、今日のメディア文化状況を把握するにも、歴史的な視点からの認識は不可欠である。

天保改革では厳しい奢侈禁止令が出され、錦絵（浮世絵版画）もぜいたく品と見なされ、画題・使用色数・販売方法などに細かな統制が加えられた。こうしたなか、江戸の絵師・歌川国芳が三枚続の錦絵『源頼光公館土蜘蛛妖怪図』で水野忠邦の改革を風刺すると、改革に苦しむ庶民はこぞって買い求めた。国芳はその後も、大奥を風刺したとされる『きたいな名医難病療治』、ペリー来航を題材とした『浮世又平名画奇特』などを描き、巷で評判となった。江戸幕府は、政治風刺はもちろん巷の話題ですら、錦絵などの出版物に盛り込み不特定多数の人々に販売することを硬く禁じていた。しかし国芳は巧妙に言い逃れ、検閲を通った錦絵で政治風刺や当節めいた話題を描くことに成功したのである。一方、幕末期の大都市では無検閲の出版物「かわら版」が日常的に販売されていた。特に弘化から嘉永期は災害の頻発・異国船来航などの大事件があい次ぎ、それらを伝えたかわら版が江戸・大坂で数多く出される。かわら版の大量出版は合法出版物である錦絵にも影響を与え、「錦絵のかわら版化」とも呼びうる現象を生む。やがて天保改革は失敗し、江戸錦絵界が再び息を吹きかえすなか、弘化・嘉永期以降には美人絵・名所絵・役者絵など、それまであった江戸錦絵のジャンル以外に、時事的な話題を伝えた「時事錦絵」とも呼びうる作品が登場し、庶民の情報源として重要な役割を果たしたのであった。「時事錦絵」は文字と絵によって情報を整理し、一種のジャーナリズムの役割を担っていったと考えられる。

本書では「時事錦絵」の例として、嘉永2年（1849）の江戸流行神（内藤新宿奪衣婆・日本橋翁稲荷・お竹大日如来）に関する錦絵・安政2年（1855）の安政江戸地震後に江戸で爆発的なブームを巻き起こした「鯰絵」・文久2年（1862）の江戸での麻疹流行をテーマとする「はしか絵」などを悉皆調査し、それらが江戸庶民社会にお

いて果たした役割を考察した。そして、それらの「時事錦絵」が、事件の経過を継続的に伝えるだけでなく、地震除け・麻疹除けといった呪術的側面をも持っていた事実を示し、人々の心性に大きな影響を及ぼしていた可能性をも指摘した。なお、本書においては一次史料として、かわら版・錦絵の資料を数百点使用したが、それらの史料の所蔵先を示すとともに、モノクロの小型版ながらも画像資料を可能な限り収録するよう努めた。とくに「はしか絵」では、漢字の読みがな部分を含めた解説文章を収録した。これらは著者なりの、画像資料公開へのささやかな挑戦であるが、画像資料を使った歴史民俗資料学研究の一助となれば幸いである。

江戸時代を代表する庶民文化である錦絵は、明治期になっても変わらぬ人気を維持し、大量の作品が作られた。そして文明開化の風俗や巷の事件・政治的話題を描いた「時事錦絵」も出されていく。幕末江戸庶民の重要な情報源であった「時事錦絵」が明治期にはどのように展開し衰えたのか、それらが明治期の庶民社会でいかなる役目を果たし、人々の心性に影響を及ぼしていたのかについては、今後の課題としたい。

（文生書院、2004年2月刊。定価4,900円）

